

# 中標津町郷土館だより 第30号

幕末の探検家

松浦

武四郎



【松浦武四郎記念館所蔵】

## 松浦武四郎と旧斜里山道

北海道の名付け親とされる武四郎が歩いた山道は、釧路～標茶～中標津～斜里をつなぐ旧斜里山道で、これはかつてアイヌの人々の重要な交通路として使われていた踏み分け道を、白糠在住の屯田である八王子千人同心の原半左衛門らによって享和元年(1801)に開削されたものです。その後、文化7年(1810)には標津川沿いの踏み分け道が改修されてこの道につながられ、明治18年(1885)の廃止までおおいに使われました。道中には通行者が一休みをする小休所や昼食をとる昼休み所、宿泊をする止宿所ししゆくじょの他、標柱や一里塚等がありました。

武四郎は、安政2年(1855)に「御雇」おやといに登用されており、幕府の役人として安政3(1856)と同5年(1858)にこの道を歩き、開拓の見込みとなる場所、アイヌの人々からの聞き取った地名や地勢を含む様々な事について記録を残しています。

# 武四郎、旧斜里山道中記録

安政三年（1856）斜里～清里峠～計根別～中標津～俵橋～標津通行



※以下、『武四郎廻浦日記巻の二十四、二十五』参考

①ニナルエサン(斜里) 【九月三日】※日付は旧暦です  
ここから、子モロ(根室)越えの入口坂道へ上る。

②ワッカウイ(清里峠) 【九月四日】  
ここより十町も右へ山に入れば大きなトド松原があって、そこに少しの水溜りがある。これより湧き出るといふ。  
通行屋一棟、板蔵一棟、その隣りにアイヌの人たちが宿泊するところがある。前に一つの川の流れてあり風景が良い。  
さて、その夜支配人が言うには、ここは誰が通っても人間にてさえあれば、少しにても雨の降らないことは無いといふ。何事を言うのかと苦笑したが、はてその夕方より曇り、夜に入りて微雨が降ってきた(中略)実に山霊のあるところと感じた。※宿泊



「巻の二十四 ワッカウイの図」『武四郎廻浦日記 下』より

③ヲタウニ(養老牛) 【九月五日】  
クスリ(釧路)とシャリ(斜里)の境柱(境界を示す柱)がある。  
ここは昔、御軽物(注1)である鷺の羽を取りにシャリ(斜里)のアイヌが住んでいたころから、その境界について、間違いが生じていた。  
この川(ケネカ川?) 鮭、鱒、アメマス、ウグイが多い。

注1: 軽物(かるもの)=交易品であるクマヤテンの毛皮、ワシの羽など

## ▼武四郎作成

とうざいえぞさんせんちりとりしらす  
『東西蝦夷山川地理取調図』(一部)



【加賀家文書館所蔵】

④ケネカブト(計根別) 【九月五日】  
橋があり、越えて小休する仮小屋がある。  
当所まで子モロ(根室)詰同心に番人一人、シベツの(標津)酋長来る。是より平地しばし、ところどころ木立原行く。

⑤チラエワタラ(当幌) 【九月五日】  
平地にして樹木がある。柏の木が多い。前にシベツ(標津)川があり、風景が良い。子モロ(根室)持通行家一棟、板蔵一棟、アイヌの介抱小屋一棟。この辺りシマリスが多い。地名のチライワタラはチライ(イトウ)がここに多く集まるといふ所。※宿泊

⑧トエビラ(標津) 【九月六日】  
又はトエトコとも云う。  
このところも蚊、アブが多い。シベツ(標津)川の南端のところ。小休所仮小屋がある。前に標柱(チナナより一里二十三丁 シベツより二里十三丁)ある。また平地ところどころ谷地もある。また浜辺に近く薪多く採った跡を見る。

⑦チナナ(俵橋) 【九月六日】  
昼休所仮小屋がある。  
このところ蚊、アブが多い。  
前に標柱(アシタロマツフより一里十一丁 トエヒラより一里二十三丁)あり。平野しばし行きてところどころ樹木立原がある。

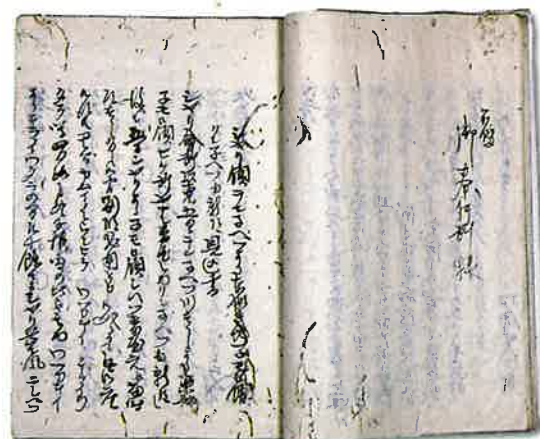
⑥アシタロマツフ(中標津) 【九月六日】  
小休所仮小屋が川の上にある。われらが行くのを待って蚊、アブが多くいたため、火を燃やしたり。  
前に標柱(チライワタラより二里七丁ツナナ一里十一丁)あり。



「チラエワタラ」『北海道歴検図 根室州 下』  
【北海道大学附属図書館所蔵】より

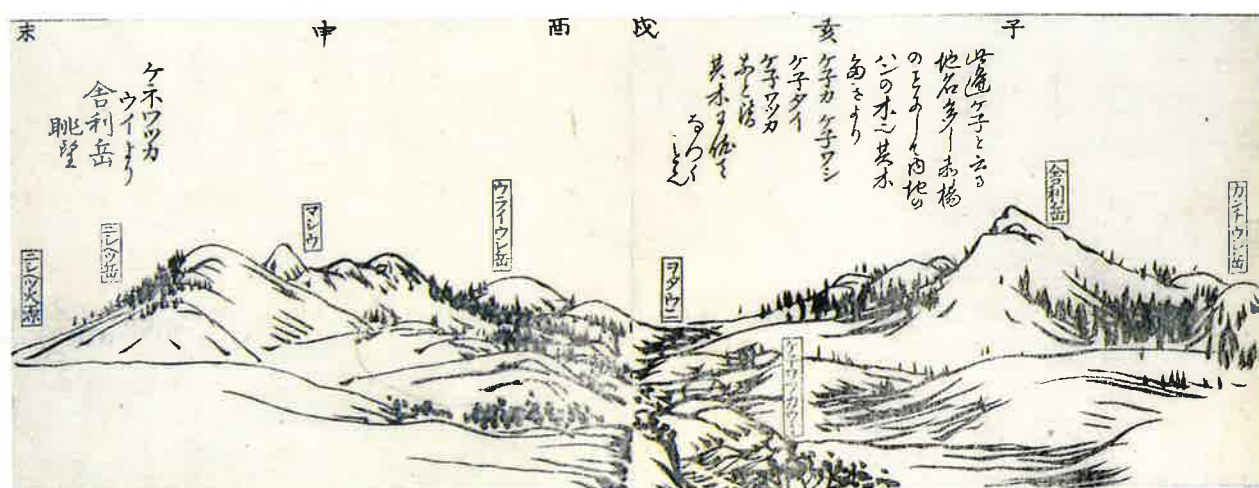
おやとい  
御雇としての使命

当時、幕府はロシアとの国境問題、東方進出に危機感を強めており、武四郎を「御雇」として登用し、蝦夷地開拓のために必要な地理的な状況などの調査を命じた。命を受けた武四郎が、箱館奉行所に対して綴った新道切り開き場所の見立てなどに関する意見書の草稿をまとめた「<sup>じんしんよせき</sup>燼心余赤」の中には、旧斜里山道の新道切り開き場所の見立てについて「シャリ領ヲンネベツより東蝦夷地 ネムロ領クンネベツえ新道見込書」も綴られている。



『燼心余赤』十四、十五  
【松浦武四郎記念館所蔵】

その意見書によれば、冬場ワッカナイ（清里峠）からチライワッタラ（当幌）の道中、斜里岳、西別岳から吹きおろし、いつ通行しても雪が溜まるため、十月から年明け三月初旬までは斜里から根室廻りまで差留め（通行止め）となっており、釧路辺から廻り根室まで来ていた。そのため、新しくシャリ領ヲンネベツからネムロ領クンネベツまで新道を切り開くことで、両場所の繁盛にもなると説いている。



『東蝦夷日誌八編』  
「ケネワッカウイより舍利（斜里）岳眺望」【北海道大学附属図書館所蔵】